

『自由と恩寵』

(リヒャルト・クローナー著、
福井一光訳、教文館)

森本あんり

(国際基督教大学学務担当副学長)

人間は、限界において自由を知覚し、制約において運命を引き受ける。自然世界には、必然性はあるが運命はない。それは、意志をもった存在者に、せりわけその意志が阻まれた時に、立ち現れるものである。本書の著者リヒャルト・クローナーは、二八歳で教授資格を取得し、四年にわたる従軍で受勲し、浩瀚な哲学史の名著『カントからヘーゲルへ』を執筆したにもかかわらず、反ユダヤ主義の勃興により教授職への道を次々と閉ざされてゆき、一九三八年にはついに「ポケットの中に一ペニヒもない」状態で亡命を余儀なくされた。「運命」を語るのに彼ほどふさわしい人物は少ない。

自然世界の因果的必然性に対して意志の自由を掲げるとは、人間の自我

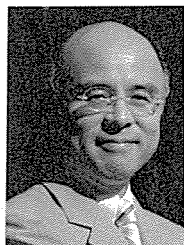
を理論理性でなく実践理性において特徴づけようとすることであり、人格の尊厳の根拠を決断や行為に見ようとするものである。それはカントに始まった理解ではなく、知と徳が不可分であることを説いたアリストテレス以来の古典的伝統でもある。

ヒトラー革命は、「倫理的理性の脆弱性」を露呈させた。ヒトラーの、ではない。その体制を支えた人々の、である。たとえば、クローナーとマルブルクの員外教授席を争ったハイデガーの。彼は、クローナーのユダヤ的な出自に対してまことに非学問的な反感をあらわにし、どす黒い悪意に満ちた嘲笑を浴びせかけた。知性と悪意とは、かくまで相反する力として一人の人間のうちに共存できるものか。深遠な哲学の思索は、人格の誠実さに対する疑義と無関係であり得るのか。そもそも自己への振り返りを内包するはずの知性が、傲慢であるということは可能なのか。

もちろん、著者はそのような問い方をしていない。本書は、やがてアメリカ

カに落ち着いて晩年を迎えたクローナーが、運命と同じように個人の人生へと射し込んで来る恩寵に開かれ、穏やかな日だまりのうちに哲学と神学の相即を語る小著である。彼の弟子であったガダマーは、戦後ドイツを訪ねてきたクローナーを評して、「これほどまでに苛酷な運命を生き抜いてきた人が、私たちの上で猛り狂った嵐にまったく襲われなかったかの様に平静に見えるのは、何という悲劇的なパラドックスであろうか」と述懐している。クローナーが「本国ではとつくの昔に消えてしまった優雅な市民的教養の雰囲気」を体現していたからである。

それに比べると、ハイデガーの知性は何と野蛮で凡庸に見えることか。そして、そのハイデガーを序列化された知性の最高権威であるかのように追いつ真の「反知性主義」とは、知性が既存の秩序や既成の権威とは別のところにある、という知的確信のこと



かける日本の学問は、何とチープで子どもじみて見えることか。真の「反知性主義」とは、知性が既存の秩序や既成の権威とは別のところにある、という知的確信のことである。

『世紀の遺書』

（巢鴨遺書編纂会編、
同会版および講談社復刻版）

山折哲雄

（宗教学者）

敗戦後、巢鴨プリズンに収監された戦犯および戦地で捕われた戦犯たちの七百余篇にのぼる遺書を集めたもの。当時、裁判で処刑された人の数は一〇六八名に達し、その中には少数のA級、大多数のB、C級が含まれていた。刑死の直前に便箋、包装紙、トイレットペーパー、書物の余白などに、鉛筆、ペン、墨、あるいは血で書きつづられたものを、困難な作業をへて一冊にまとめている。なかには「刑死後は、復讐を」とささやいて処刑された人もい

るが、戦犯としての刑死は戦死であるとし、従容として最期を迎え家族の幸福、祖国と世界の平和を願って死にいた人もすくなくない。

戦争中の軍人の行為をめぐって、戦勝国が敗戦国を一方的に裁くことができるのか、そもそも戦時中の行為を法廷で裁くことができるのかなど、矛盾にみちた問題が生じたことはいうまでもない。国家に強制された行為に個人の責任をどこまで問うことができるのか、容易には解決のつかない問いも浮上するからだ。

巢鴨プリズンの絞首刑は、たいていの場合、木曜日の夜に呼び出されたという。金曜は一日かかって遺書を書き、夜半から土曜の明け方にかけて執行された。後に明らかにされた米国の公開記録によると、処刑直前の部屋の中における本人の行動が、五分から二、三分分钟で看守の眼によって報告されていた。そのほとんどが「粗末な机の前にかがんで鉛筆を握っている」とある。半ば強制された理不尽な死を前にした



過酷な運命の中かしぼり出されるぎりぎりの言葉が「遺書」に脈打っている

とき、人間はどのような態度を示すのか、心の姿をあらわにするのか、そのような過酷な運命の中かしぼり出されるぎりぎりの言葉が、それらの「遺書」の全面に、その行間に、その見えざる背面の奥に音を立てて脈打っているのである。

この『世紀の遺書』に序文を寄せているのが、プリズンの教誨師だった田嶋隆純である。僧職にあり、仏教学を講ずる大正大学の教授だったが、A級戦犯が処刑されたあと、B、C級戦犯たちの心の導師となって「巢鴨の父」と慕われ、信頼されるようになった人物だ。法を説く教誨の仕事よりも、戦犯たちの助命嘆願の運動に献身したのである。その「序文」の最後のところ
で師は次のように書いている。